

# マルクス『経済学批判要綱』における 「プラン」と「資本の流通過程」(2)

嶋 田 力 夫

## 目 次

はじめに

- 1 『経済学批判要綱』執筆過程における「プラン」と「資本の流通過程」
  - I 「前期プラン」と「資本の流通過程」
  - II 「後期プラン」と「資本の流通過程」(以上6号)
- 2 『経済学批判要綱』執筆後における「プラン」と「資本の流通過程」
  - I 「七冊のノート(第一部)への索引〔第一案〕」と「資本の流通過程」
  - II いわゆる「1859年プラン草案」と「資本の流通過程」  
(以上本号)

結 語

## 2. 『経済学批判要綱』執筆後における「プラン」と「資本の流通過程」

### I. 「七冊のノート(第一部)への索引〔第一案〕」と「資本の流通過程」

〔1〕1857年8月23日から書き始められた『経済学批判要綱』の「七冊のノート」は翌年の1858年6月初旬に一応その執筆を終えることになったのであるが、マルクスはその執筆が終わりに近づいていた時期、すなわち1858年3月初旬に、ラサールの仲介によってベルリンの出版社ドゥンカーから経済学の著作を分冊で出版することにしていた。肝臓病の再発によって、「苦い肝汗のためにペンが運びにくい」状態がしばしばであったが、出版に寄せるマルクスの意気込みはなみなみならぬものがあつた。この間の事情は1858年3月11日付のラサール宛の手紙、同月29日付および4月2日付のエンゲルス宛の手紙によってつぶさに知ることができるが、それはともかく、現実には書き進めている「七冊のノート」は「ブルジョア経済学体系の批判的叙述」を「体系の叙述」として書きあげようとしていたこうした著作——この第一分冊は3月11日付のラサール宛の手紙によれば、「(1)価値、(2)貨幣、(3)資本一般(資本の生産過程、資本の流通過程、両者の統一または資本および利

潤・利子)」を含み、それを「独立した一冊」にする予定であつた——にとってその土台をなすものとしてあつた。しかし、実際に「体系の叙述」として展開していくためには、この「七冊のノート」をあらためて読み直し、「索引」を作らねばならなかつたのである。というのは、1858年5月31日付のエンゲルス宛の手紙から知ることができるよう、この「七冊のノート」自身のなかには「いろいろなことがごちゃ混ぜになって」いたため、マルクスが予定していた「第一分冊」に取り入れるべき内容が「どのノート、どのページに乱雑に書いてあるか、を調べてみなければならなかつたからである。

そこでマルクスは、6月前半にまず「七冊のノート(第一部)への索引」を二案作成することになった。そのうち第一案は以下にみるとおりであるが、第二案は、1)尺度としての貨幣、2)交換手段としての貨幣、〔3〕貨幣としての貨幣という貨幣論に関するプランである。それゆえ、「七冊のノート」執筆後、それを土台にして「体系の叙述」を行なおうとしていたこの時点で、マルクスは「資本の流通過程」をいかなる理論領域にあるものとしてとらえていたかを検討するわれわれの問題視角からすれば、この第二案は当然考察対

象から除外されてしかるべきものとしてあろう。

そこでまず、「七冊のノート（第一部）への索引〔第一案〕」の検討から入ることにしよう。

〔2〕 この第一案の索引について細かな目次を除いてあげておけば以下のようなものである。

## I 価値

### II 貨幣

一般的に価値の貨幣への移行。交換そのものの産物

貨幣の三つの規定

- 1 尺度としての貨幣
- 2 交換手段としての貨幣または単純な流通
- 3 貨幣としての貨幣

貨幣の解体的作用

- 4 貨幣の担い手としての貴金属
- 5 単純な流通のなかに現われる取得法則
- 6 貨幣の資本への移行

### III 資本一般

貨幣の資本への移行

- 1 資本の生産過程
  - a 資本と労働能力との交換
  - b 絶対的剰余価値
  - c 相対的剰余価値
  - d 本源的蓄積
  - e 取得法則の変転
- 2 資本の流通過程 (Gr., S. 855—859, 訳. V. 967—973頁)

みられるように、「体系の叙述」の「順序」を示すものとして初めて示されたこの第一案は、先きにあげた1858年3月11日付のサラール宛の手紙のなかでマルクスがはじめて提示した「資本一般」に関する全体系のうち、主として「資本の生産過程」の部分までを詳細かつ具体的にしたものである。したがってこうしたプランの性格からみてマルクスが「七冊のノート」を執筆する際に設定していたところの古典派経済学批判の基本的問題規角、すなわち「資本と労働とのあいだの交換」を流通と生産との「二つの過程」に分解し、一方を他方に対する「序章」的關係にあるものとしていた視角がこの第一案を作成した時点でもなお整合性を保持しうるものとしてあったか否か、体系的な叙述を試みようとするほど当初の基本的問題視角そのもののなかに胚胎していた矛盾

が顕現してきているか否かという観点からみるならば、「貨幣の資本への移行」が「II 貨幣」の「6」の項目として解かれている場合と「III 資本一般」の「1 資本の生産過程」の序論的位置にある場合というように、二重に解かれている点が特に注目されるべきものとしてあるであろう<sup>(11)</sup>。しかし、われわれの考察対象たる「資本の流通過程」については、みられるように、「III 資本一般」の「2. 資本の流通過程」という表題が示されているのみで、それ自体がどのような理論内容をともなつて展開されるべきものであるかについては何んら明示されていない。それゆえ、この第一案からは「資本の流通過程」は「III 資本一般」の全体系のうち「1 資本の生産過程」の「e 取得法則の変転」の展開の後にはじめて明かにされうる関係にあるという体系的な位置付けのみを看取しうるにすぎない。

(11) この「索引」の第一案で「貨幣の資本への移行」が二重に解かれているということはきわめて特異なものとして注目しておく必要がある。というのはマルクスがこの時点で「資本一般」の統一的な体系構成をどの程度整合性をもって展開しえていたかを明かにするうえで、この「貨幣の資本への移行」の二重性の検討は欠くことのできないものとしてあるからである。それは、「貨幣の資本への移行」が「資本一般」の統一的な体系構成のうえで「序章」的關係に置かれていた価値・貨幣論と、そのあとの、いわば「本論」としての「資本の生産過程」そのものの分析との接点に位置しているということからみて当然のことと言えよう。ただそればかりではなくさらに注目されることは、こうした叙述プランと同様の構成がこの第一案のすぐのちの1858年8月初旬から9月中旬に書かれた『経済学批判』原初稿の断片にも、

#### 第二章 貨幣

- 5) 単純な流通における取得法則の現象 (ノート B' 17—21, ノート B" 1—3)
- 6) 資本への移行 (ノート B" 4—15)

#### 第三章 資本

##### A 資本の生産過程

- 1) 貨幣の資本への転化 (ノート B" II 16—19)

として具現されていたにもかかわらず、1859年6月11日に刊行された『経済学批判 (第一分冊)』では

#### 序言

#### 第一部 資本について

## 第一篇 資本一般

### 第一章 商品

#### A 商品分析の史的考察

### 第二章 貨幣または単純な流通

#### 一 価値尺度

#### B 貨幣の度量単位に関する諸学説

#### 二 流通手段

- a 商品の変態。b 貨幣の流通。c 铸貨。  
価値章標

#### 三 貨幣

- a 貨幣蓄蔵。b 支払手段。c 世界貨幣

#### 四 貴金属

- c 流通手段と貨幣とに関する諸学説

となっていることである。つまり『経済学批判(第一分冊)』では「5) 単純な流通における取得法則の現象」も「6) 資本への移行」もともに考察対象から除外されているのである。『経済学批判(第一分冊)』でこうした構成へと変更していった根拠をいかなる点に求めるかといえは、それは、叙述展開の端初を「I 価値」からではなく、いまだ「使用価値と交換価値」という「二重の観点」からであるとはいえ、「商品」から展開したことと対応するものであることは言うまでもないことであろう。このことは、他面から見れば、のちの現行『資本論』第1部第2篇で「貨幣の資本への転化」として独立して取り扱われていることからわかるように、すでにこの時点で「貨幣の資本への移行」の問題を単に貨幣論の枠内で取り扱うというよりも独立の一篇をもって取り扱う構想をもっていたものと言えよう。なお、この点については、資料的な裏付をふまえて詳細に検討したものとして、時永淑教授による「『資本論』の成立過程(2)」(『経済志林』第40巻第3号、1972年9月)がある。なかでもその論稿のP.32~P.48にわたって詳論されているので是非参照されたい。

ところで、この「索引」の「第一案」を作成したのちマルクスは、この「索引」を「導びきの糸」としつつ1858年8月初旬から9月中旬にかけて『経済学批判』の原初稿を執筆したのであった。(12) しかしこの原初稿のうち、特に「始めの二つの章」すなわち、第一章「商品」および第二章「貨幣または単純な流通」の内容をなすべき部分が「草案には全然書いてなかった」に等しいもの、あるいは「ごく簡単な輪郭しか書いてなかった」(1858年11月29日付のエンゲルス宛の手紙参照。岡崎次郎訳『マルクス=エンゲルス資本論書簡』国民文庫版1、263—265頁。)ため、彼は再び同

年9月中旬以降、「七冊のノート」を基礎にして、改めて『経済学批判』の「第一分冊」の原稿の作成にとりかかることになった。その最終印刷用原稿は翌1859年1月21日にできあがり、同年6月11日にベルリンのダウンカー社から『経済学批判(第一分冊)』(Zur Kritik der Politischen Ökonomie. Erstes Heft)として「第一部資本について。第一編 資本一般」(Erstes Buch, Vom Kapital. Abschnitt I, Das Kapital im allgemeinen)という表題を付して出版された。しかしこの著作は、周知のように、「主要な章すなわち資本に関する第3章をまだ含んで」おらず商品と貨幣との二章だけを含むにすぎなかった。したがって、この著作には当然「資本の流通過程」の考察は含まれていない。むしろこの「第一分冊」執筆後マルクスにとって「第三章からほんとうの戦争が始まる」ものと考えられていたのである。(同年3月28日付のフェルディナント・ラサール宛の手紙参照。前掲訳書、1、280頁)。

(12) この『経済学批判』の原初稿の執筆時期については、現在モスクワとベルリンのマルクス=レーニン主義研究所の共同作業として刊行されている新しい『歴史的=批判的全集』(K. Marx / F. Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe. 以後『新MEGA』と略称する。)の見本版(Probendand, Dietz Verlag Berlin, 1972)の630ページに、同年9月—10月頃作成との新たな推定がなされているということが時永淑教授によって紹介されている。(『『資本論』の成立過程(1)、(2)』『経済志林』第40巻第2号、1972年7月、62頁、および第3号、同年9月、29頁。)しかし、時永教授も指摘しているように、その推定の根拠がいまだ明確でないので、ここではその執筆時期を通説に従って8月初旬から9月中旬としておいた。なおこの原初稿はノートCおよびノートB'とB''からなるものであるが、現存しているのはノートB'とB''のみであって、「『批判』の第1章と第2章の最初の部分の原初稿をふくんでいた」(Gr., S.951, 訳.V. 1073頁)とされるノートCは現存しない。したがって、この点からしても原初稿のもつ資料的な意義の確定は今後の研究に待つほかはないものと思われる。

こうしてマルクスは『経済学批判(第一分冊)』のための印刷用原稿を作成した後の1859年2—3月頃に、新たに「第三章 資本」の執筆にとりか

かるためにあらためて「七冊のノート」を読み直し、「私自身のノートへの心覚え」(ノートB<sup>1</sup> B<sup>2</sup>Ⅱ [28]—[36]ページ。Gr. S. 951—957, 訳, V. 1073—1096頁)と「『経済学批判』の『第3章』, 『資本』の章の第1篇の起草のため」(Gr., S. 969, 訳, V. 1097頁)の「1859年のプラン草案」(一冊の特別のノート[1]—[16]ページ。Gr., S. 969—980, 訳, V. 1097—1111頁。)とを作成している。

そこで、こうした「心覚え」や「プラン」のうち、特にいわゆる「1859年のプラン草案」を中心にしてマルクスは「資本の流通過程」を「叙述の体系」としていかなる理論領域と内容とをもつものと考えていたかをさらに明かにしておこう<sup>(13)</sup>。

(13) これまで、1859年2—3月頃に作成されたものとされていたいわゆる「1859年プラン」については、その作成時期を「1861年の夏」とする新たな推定がなされている。それは、1973年に公刊されたロシア語版『マルクス・エンゲルス著作集』第47巻——いわゆる「23冊の経済学批判ノート」のうち、すでに『剰余価値学説史』として公刊された部分(ノートVI—XV およびXVⅢ)を除いたノート部分の前半(ノートI—V)をはじめて公表したもの——の巻末部分の注で「十中八九まで確実に61年の夏に作成されたもの」(619ページ)とした見解がそれであり、さらに『新MEGA』のⅡ/3・1巻(Manuskript 1861—1863. Teil 1, 1976年, Dietz Verlag Berlin)の序文S. 12\*—13\*においても、「1861年の夏」のプランとして表示し論じているものは従来「1859年プラン」と称していたものを指し示すものであることは疑いえない。

ところで、こうした「61年の夏」説は、これまでドイツ語版『経済学批判要綱』(1939・41年)以来、ロシア語版『マルクス・エンゲルス著作集』第46巻第1・2部(1968—9年)においても追認すれ定説化されていた「59年」説に対する重大なる変更である。それにもかかわらず、その変更の根拠は何んら示されていないのである。ヴェ・エス・ヴィゴツキーによれば、この変更はヴェ・カ・ブルシリンスキーによって行なわれたものとのことであるが、ブルシリンスキーは実はロシア語版の『要綱』である『マルクス・エンゲルス著作集』第46巻の編集者であり、ヴィゴツキーはその「第1部出版準備者」の一人でもあったのである。つまり、1968～9年に公刊された第46巻から1973年に公刊された第47巻までのわずかな期間に同一人によって基本的に相異なる見

解が発表されたということになる。それだけに、その変更の根拠が示されていないということは不可思議なことというほかない。それはともかく、こうした変更が第46巻の『要綱』それ自体の編集過程で問題とならず、他の原稿を扱った第47巻ではじめて示唆されたということは、1861—3年の「23冊の経済学批判ノート」の未発表部分たる「資本の生産過程」の検討を通じて導びき出されたものであると推定される。すなわち「61年の夏」と変更したことは、そのプランが「23冊の経済学批判ノート」を書くうえでの直接の前提として作成されたものとみなしているわけである。同時に、1859年2月に書かれたものとされていたノートB<sup>1</sup>, B<sup>2</sup>Ⅱにおける「私自身へのノートの心覚え」も、「1861年の夏」に書かれたものとみなされ、作成時期の変更がなされているのである。

しかし、こうした「61年の夏」説は、その変更の明確なる根拠が示されないかぎり、にわかに受け入れられるものとはならないであろう。というのは、これまでの「59年」説が二度にわたり確認されたように、それ自体を検討してみても特に不自然な点が見い出せないからである。すなわち、1857年から1861年までの書簡を含む現行『マルクス・エンゲルス全集』によると、マルクスが「七冊のノート」の索引に關説した手紙として存在するものは、1858年5月31日付のエンゲルス宛の手紙のみであって、ここでは次のように述べている。

「……………やっと仕事ができるようになったので、さっそく印刷のための仕上げに取りかかる。………いまいまいしいことには、原稿(これは印刷すれば分厚い一巻になるだろう)のなかにはいろいろなことがごちゃ混ぜになっており、ずっとあとのほうに置くべき箇所がたくさんあるのだ。こういうわけで、僕は索引を一つ作って、僕がまず著作に取り入れるべきものがどのノート、どのページに乱雑に書いてあるか、を調べてみなければならないのだ。」(岡崎次郎訳『マルクス＝エンゲルス資本論書簡』(1), 255—257頁)と。

この手紙の記述に依拠して、ドイツ語版の『要綱』の編集者たるマルクス＝エンゲルス研究所は、その「序文」において、「マルクスはこうして『七冊のノート(最初の部分)への索引』という表題をつけた事項索引を作成した」(Cr., XII, 訳, I. XIII)ものと断じ、ロシア語版『要綱』の編者もこの見解に対しては特に異議をとらえてはいないのである。そのうえさらに、問題となっている「心覚え」と「プラン」は、この「七冊のノートへの索引」から8ヶ

月後の1859年2—3月にかけて作成されたものとみなされていたわけであるが、その作成事情は次のようなものであった。すなわち、『経済学批判（第一分冊）』のための印刷用原稿が1859年1月21日に完成し、それを同月25日にベルリンのダウンカー（出版社）宛に送り、そして2月23日に「序言」を脱稿したその直後から、マルクスは「第三章からほんとうの戦争が始まる」（同年3月28日付ラサール宛の手紙。前掲訳書、(1) 280頁）ものと考え、その仕事にとりかかるためにあらためて全ノートを読み直して作成したものであった。もちろん、われわれも、この「プラン」が1861—3年のいわゆる「23冊の経済学批判ノート」を書くうえでその「導きの糸」として役立ったことを否定するものではないが、しかし1861年の夏までのマルクスの書簡をみるかぎり索引作成に関説したものが見当たらないので、「七冊のノート」執筆後3年を経過した時点で改めて全ノートが読み直され、そのうえで詳細な「心覚え」や「プラン」が作成されたものとは考えられない。むしろ、これまでの通説による推定の方が無理のない見解であるように思われる。いずれにしても「61年の夏」説の論拠が明示されていない今日の段階では速断は許さず、今後に残された問題としていずれあらためて検討されるべき性格のものであろう。

「私自身のノートへの心覚え」といわゆる「1859年のプラン草案」との作成時期に関し以上のような不確定要因が存在するため、『要綱』段階において「資本の流通過程」がいかなる理論領域を有していたかを明かにする場合、特有の困難性が生じなわけにはいかない。いずれにせよ「心覚え」と「プラン」の両者は「七冊のノート」を前提し、これに依拠して作成されたということ、また「資本の流通過程」に関しては「七冊のノート」執筆以降1861年の夏までの時点にかぎってみても、その間に具体的な研究がなされてはおらず、それは『資本論』第二部初稿（1864年）をまって初めて示されたということ等を考え合せると、両者ともこれまでの通説に従って1859年2—3月に作成されたものとしたうえで考察したとしても疑義を生じるものではないものと思われる。したがって、本稿では通説に従って考察を加えておくこととする。

なお、現行ドイツ語版『要綱』の「序文」の見解を踏襲したロシア語版『要綱』の「序文」を翻訳紹介したものとして、山本義彦氏による「ロシア語版『経済学批判要綱』について」(1)、とロシア語版とドイツ語版の目次対照表を掲載した(2)（大阪市大『経済学雑誌』第67巻2、3号、1972年8月、9月）

とがあり是非参照されたい。

## II. いわゆる「1859年プラン草案」と「資本の流通過程」

〔1〕 いわゆる「1859年プラン草案」の全体系は「七冊のノート」への参照ページ記号を取り除いて示しておけば以下のようなものである。

### II 資本の生産過程

#### (1) 貨幣の資本への転化

##### α 移行

資本が単なる価値額として表示されるならば、何も表現されてはいない。貨幣の蓄蔵は資本化ではない。流通と流通から生じる交換価値とが資本の前提である。

（交換価値としての資本は、使用価値としての労働と対立する。）

シスモンディ。

商業資本と資本一般。商人と手工業〔者〕。

##### β 資本と労働能力との交換

労働者の側における販売の繰り返し。

賃金は生産的ではない。

労働者の流通  $W-G-W$ 。

この交換の諸条件は、労働者の非所有である。

抽象的労働は資本に相對している。

労働の交換価値。

使用価値の消費は、ここでは経済過程の内部に属する。（資本は賃労働を創造するものである。）

賃労働と資本との関係の歴史的條件。

労働能力。

平均賃金（われわれの考察では最低限と想定することが必要）。

ケアリの利潤論。

ロッシ。（資本の素材的成分。賃金制度は資本の本質に属するか？）

交換の諸条件。労働者は潜勢的な受救貧民である。

トレンズ。労働ではなく資本が商品の価値を規定する。（リカード学派の混乱。

資本家のもとでの剰余価値の計算）

##### γ 労働過程

生産的消費（ニューマン）。

##### δ 価値増殖過程

剰余価値の一般的概念。  
生産力の増大、量と質。  
生産力と絶対的労働時間が与えられておれば、同時的な労働日の数が増加されなければならない。  
同時的な諸労働日、同前。人口。  
生産力の増大は、資本のうちその可変部分に比べての不変部分の増加に一致する同じ労働者数を増大した生産力をもって充用するために、資本をふやさなければならない程度。  
自由に利用できる時間。  
労働の結合。  
マカロック。

## (2) 絶対的剰余価値

絶対的で必要な労働時間（剰余労働。剰余人口）。

剰余労働。（ラムジ。ウェード）。

剰余労働と必要労働。

シーニア

## (3) 相対的剰余価値

$\alpha$  多人数の協業

$\beta$  分業

自由労働が結合されていない場合には、奴隷労働のほうが自由労働よりも生産的である。ウェークフィールド。

$\gamma$  機械装置

機械装置による原料の利得（節約）。

諸商品の価格、プルドン。

## (4) 本源的蓄積

剰余生産物。剰余資本。

資本は賃労働を生産する。

本源的蓄積。

労働能力の集積（ロッシ。結合）。

種々の形態の剰余価値および種々の手段による剰余価値。

相〔対的〕剰余価値と絶〔対的〕剰余価値との結合。

生産諸部門の多様化。

人口。

## (5) 賃労働と資本

資本は集合的な力であり文明である（ウェード）（バベジ）。

資本＝前貸。

賃金による労働者の再生産。

自己自身を揚棄する資本主義的生産の制限。自由に利用できる時間。労働自身が社会的労働に転化される。オーエン。

現実の経済。労働時間の節約。しかし〔生産力の発展と一引用者〕対立的ではない。

単純な商品流通における取得法則の現象  
この法則の変転。

## II 資本の流過程

① 資本の価値増殖過程は同時にその喪失過程である。

② 諸矛盾。〔これは第二篇、諸資本の競争に属する。〕

③ 資本は、生産と価値増殖との過程としての統一である。

④ 資本の普及傾向。

⑤ 資本の文明化傾向。

⑥ 生産と価値増殖とのあいだの矛盾。

⑦ 商品の貨幣への転化。

⑧ 資本の流通。チャマーズ。チャマーズにたいして、ブレイク。

⑨ 生産過程、流過程。

⑩ 遊休資本。

⑪ 種々の生産期間。

⑫ J・St・ミル、流通期間。（遊休資本。）

⑬ 資本の流通。

⑭ 流通費用。

⑮ 流動資本。固定資本。それ〔資本のただ違った経過的規定として現われたにすぎない両資本—引用者〕から、二つの特殊な種類としての流動資本と固定資本とへの移行。

⑯ 回転。種々な回転の数。

⑰ 流通期間。

⑱ 商品資本、貨幣資本、産業資本。

⑲ 資本の種々の回転の尺度としての一年。

⑳ 固定資本。流動資本。

㉑ 大流通と小流通。

㉒ 全流通は、三重である。

㉓ 固定資本。流動資本。両方において、労働の社会的規定は資本に移されてい

- る。
- ②④延長された流通期間=再生連の回数の減少、または生産過程にある資本量の減少。連続性は、固定資本とともに必然的になる。それと同時に、中断は前提された価値の喪失になる。
- ②⑤固定資本、および労働にたいする需要。(パートン)。
- ②⑥固定資本。社会における固定資本と流動資本との割合。流動資本よりも高い潜勢力。
- ②⑦固定資本の耐久性。
- ②⑧貨幣は、固定資本でもあり流動資本でもある。
- ②⑨個人的消費との関連における固定資本と流動資本。
- ③⑩総資本の平均回転(その価値増殖との関連における)。固定資本と流動資本との回転の割合。連続性。流動資本と固定資本にとっての、生産の中断の相違。固定資本の再生産期間は経済循環の尺度単位になる。総再生産局面。
- ③⑪流動資本と固定資本との違った復帰。
- ③⑫その使用価値が流通にはいってゆく固定資本。
- ③⑬固定資本の生産と流動資本の生産。
- ③⑭固定資本の維持費。
- ③⑮固定資本の収入と流動資本の収入。(固定資本の還流と流動資本の還流)
- ③⑯商品の使用価値による再生産の規定。

### Ⅲ 資本と利潤

利潤率と剰余価値。  
 資本と利潤。  
 同じ労働量を充用するために、生産力の増大を伴う資本の増加。  
 危険。利子、生産費。  
 資本のすべての部分の均等な利潤。  
 賃金と利潤、生産諸形態、それゆえ分配諸形態、その他。

### 雑録

資本の種々な説明。  
 資本は「単なる生産用具」である。(資本が物として把握されている)。(資本は、単純な関係ではなく、過程である)。

資本と生産物。

生産的労働と不生産的労働。

農業、土地所有、および資本。

市場。

利潤の根拠。

生産費。

資本〔家〕の支出ではなく、前貸である(シェトルヒ。節約説への反対)。

プルドンと利子、その他。彼の土地所有の経済外的起源説。剰余価値。(リチャード・プライスとプルドン)

賃金制度に関するバスティアの所説。利潤に関する所説。

農業(それ自体勤労による農業。15世紀ハリソン)。

貨幣資本。

リカード。剰余価値の発生。賃金と利潤とは単なる分配分。

(リカードに反対するウェークフィールド)。(比例配分としての賃金に反対するマルサス)。

マルサス。価値論。

スミスの労働犠牲説。シーニアの節欲犠牲説。

スミスの利潤発生論。それに反対するローダデル。

マカロックの剰余価値発生論。賃金は労働者自身の生産物の一部分である。

賃労働と奴隷制。ステュアート。同じステュアート。機械。](Gr., S. 969—980, 訳. V. 1097—1111頁)

※上記「プラン草案」のうち、「Ⅱ資本の流通過程」の各項目の頭につけられている①～⑳までの通し番号は考察の便宜上筆者が付したものである。

以上のように、この「プラン草案」はマルクスが「資本一般」に関する全体系を初めて具体的に示したものであり、「資本の流通過程」はこの体系のうち、「Ⅰ資本の生産過程」と「Ⅲ資本と利潤」の中間に位置するものとして、理論的に説かれている。それは先きの「Ⅲ資本と利潤」を欠いた「七冊のノート(第1部)への索引[第一案]」で単に「Ⅲ資本一般」のうちに「Ⅱ資本の流通過程」

程」という項目としてのみ示されていたプランに対して、素材的に未整理なかたちではあるが、このプランを通してわれわれは『要綱』段階でのマルクスが「資本の流通過程」をいかなる理論領域を有するものとして考えていたかが理解できる。

そこで、①から⑳の項目によって展開されるべきものと考えていた「資本の流通過程」が基本的にいかなる論理ににもとづいて説かれていたかを以下みておこう (14)。

(14) この「プラン草案」の「資本の流通過程」に示された36項目のそれぞれの内容の概略については、マルクスによる『要綱』の指示ページにしたがって逐次検討したものとして水谷謙治氏の『経済学批判要綱』における資本の流通過程——流動資本と固定資本の諸規定の検討を中心として——(上), (下), (『立教経済学研究』, 第23巻第2号, 4号, 1969年7月, 1970年1月)がある。この36項目の個々の項目がいかなる内容を有しているかについては水谷氏の上記の論文の(上)7—20頁を参照されたい。本稿ではマルクスがこの36項目を通じて展開している基本的ロジックを析出することに限定して考察を行なう。なお、後に述べるように、『要綱』段階での「資本の流通過程」の理論内容とその領域がいかなるものであったかの評価に関しては、水谷氏とは見解を異にする。

[2] 全体36項目にわたる「Ⅱ資本の流通過程」のプランを「Ⅰ資本の生産過程」の「プラン」と対比してみると、「Ⅱ資本の流通過程」で展開されるべき内容項目がただ単に列挙されているにすぎないという面は否めない事実としてあるが、しかしこの「プラン草案」から次の点はその特徴点として抽出しうるであろう。

まず第一に、のちの『資本論』第二部「資本の流通過程」の項目と形式的に対比してみるならば、その第一篇第1章から第4章までで取り扱われている「資本循環論」の内容に相当する項目と第三篇「社会的総資本の再生産と流通」にあたるものが欠除しているということ、第二に、こうした理論的な枠組を前提としつつ、さらに全36項目の展開の順序そのものから指摘しうることは、大別して①「資本の価値増殖過程は同時にその喪失過程である」から始まって⑭「流通費用」で終る前半の部分と⑰「流動資本・固定資本」から⑳「商品の使用価値による再生産の規定」に至る後

半部分とに分けることができるということである。

そこでまず①から⑭までの前半部分の基本的な論理からみてゆこう。ここでマルクスが「資本の価値増殖過程は同時にその喪失過程である」ということを起点に措えて、「資本の流通過程」を展開したということは、先きにも見たように、1857年12月中旬頃から1858年1月22日にかけて作成したノートⅣの15ページ以降で「資本の流通過程」を本格的に考察する際に提示した方法的視点をいわば直接的に受け止めるかたちで展開したものとすることができる。すなわち、その方法的視点とは次のようなものであった。

「すでにわれわれは、資本がどのように価値増殖過程を通じて、1)その価値を交換自体(すなわち生きた労働との交換)によって維持し、2)増加させ、剰余価値をつくりだすかを見てきた。いまや生産過程と価値増殖過程のこうした統一の結果として過程の生産物すなわち資本自体が現れるのであるが、その資本は、生産物としては、その前提としていた過程から出てくるのであり、一また価値である生産物として出てくるのである。……。さしあたり、措定され現存しているものは、一定の(観念的な)価格をもった商品である。すなわち、ただ一定の貨幣額として観念的にのみ存在している商品であり、交換ではじめて一定の貨幣額として実現されるべき商品、したがって貨幣として措定されるためには再び単純な流通過程にはいりこまなければならない商品である。だからわれわれはいまや、資本が資本として措定される過程の第3の側面にくることになる」(Gr. S. 305—6, 訳. II. 329—330頁)と。

こうした方法的視点はこれ以前のノートⅢ(1857年11月29日—12月中旬頃)で初めて明かにされた「資本」に関する章別構成、すなわち「生産にかんする章は客体的には結果としての生産物をもって終わり、流通にかんする章は、商品をもってはじまる。」(Gr. S. 227, 訳, II. 241頁)とした視点をより具体化したものといえることができるが、それはともかく、ここで言う「資本が資本として措定される過程の第3の側面」とは「価値増殖過程」としての「資本の生産過程」の結果の生産物



W'のG' への実現過程を意味するものにほかならない。したがってこの時点のマルクスにあっては、「資本の流通過程」を資本の運動としてのG—W……P……W'—G'のうちのW'—G'の過程に局限して説くという、いわば実現流通論的見地を保持していたものといつてよい。それゆえ、こうした方法的視点に立つ限り、「資本の流通過程」の考察の端初でまず説かなければならないものは資本の生産物W'が流通過程を経過せざるをえないということを経過過程たる生産過程に対していかなる関係にあるかを明かにすることであり、それが「資本の価値増殖過程は同時にその喪失過程である」という表題のもとに展開されるべき問題として顕現したものといえよう。というのは、この場合マルクスが考察対象としていた「価値喪失過程」とは生産力の増大にともなう資本自体が価値喪失する場合ではなく、「資本が貨幣の形態から商品の形態に移行していること、実現されるべき一定の価格をもつ生産物の形態に移行していること」(Gr., S. 306, 訳. II. 330—331), すなわちここで言う「第3の側面」を念頭におきその問題に限定していたからである。これに対応して、価値増殖過程としての生産過程における生産時間を制約する「価値喪失」としての流通時間の問題は流通時間=0と措定することが資本にとって必然的な傾向であるという視点から「流通費用」の問題を中心に考察されることになったものと言える。(15)

(15) ①から⑭までの項目のすべてが上述の前半部分の論理に合致した項目であるというのでは勿論ない。なかでも、③「資本の流通。チャマーズ。チャマーズにたいして、ブレイク」、⑨「生産過程、流通過程」、⑬「資本の流通」の各項目はのちに述べるように、むしろ後半の論理のうちの「総過程」論的視点といつてもよい内容を示している。しかしこうした異質の視点が混在しているにしても、この時点のマルクスが「資本の流通過程」の考察の始源を何にもとめていたかということの意義と限界を明かにしておくことがなによりも重要であると思われる。というのは、従来の研究ではほとんどこの点の意義が等閑視されているからである。『要綱』の「資本の流通過程」を「1859年プラン草案」とのかかわりで先駆的に研究した水谷氏の前掲の論文においてさえも、われわれの言う①から⑭までの前半部分をさらに①から⑥までの「第一の部分」と、⑥から

⑭までの「第二の部分」とに細分し、そして前者を「序論的部分」(前掲論文, (上)22頁)とするのみで「資本の流通過程」を展開する際の始源のもつ意義を積極的に評価することなしに考察対象から除外し、後者の「第二の部分」とした点を⑯以降のわれわれの言う後半部分とともに「流動資本, 固定資本」という概念の二重, 三重に相異なる諸規定を中心にして, 資本の流通上の諸問題が展開されている」(前掲論文(上)22—3頁)ものとする観点から考察するという事になっている。

確かに、水谷氏の指摘の如く、この『要綱』の「資本の流通過程」では「流動資本, 固定資本の概念が全展開のいわば軸」(前掲論文, (上)22頁)になっているといえるが、しかしこうした概念自体の考察にあたっては、のちに述べるように、この時点におけるマルクスが「資本の流通過程」をどういう枠組のなかで考えていたかという点を等閑視しては十分なものとはならないであろうし、またこのことが同時に『資本論』体系成立史上にもつ『要綱』の「資本の流通過程」の意義と限界を確定するうえで不十分な点を残す結果を生むことになる。

こうした前半部分の論理、すなわち、W'のG'への実現流通論的見地からする「資本の流通過程」把握に対して、⑯以降の後半部分では、前半部分の論理とは異なり「流動資本」と「固定資本」との二重, 三重の概念規定を中心にして、生産過程を包摂した資本の措定する流通としての「資本の流通」を展開することになっている。この後半部分の論理を最も端的に表現したものは「資本の流通」を「三重」からなるものとしてとらえた次の規定である。

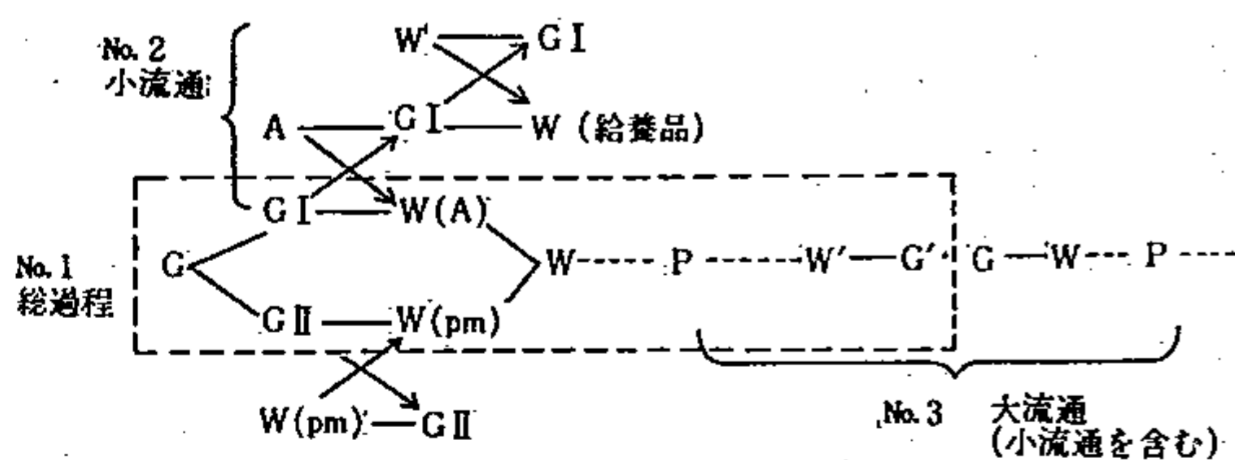
「全体としてみれば流通は三重に現れる。1) 総過程—資本がその異なった諸契機を経過すること。これによれば資本は流れにある(imFluß)ものとして、流動しつつある(zirkulierend)ものとして措定されている。諸契機のいずれにおいても連続性が潜在的に(virtualiter)中断せられ、次の局面への移行にさからって固定されうるかぎりでは、資本はここでもまた異なった諸関係のうちに固定されたものとして現れるのであり、またこのような固定存在(Fixiertsein)の異なった諸様式は異なった諸資本、すなわち商品資本, 貨幣資本, 生産諸条件としての資本を構成する。

2) 資本と労働力能のあいだの小流通。これは

生産過程に付随し、また契約、交換、交易形態 (Verkehrsform) として現れ、生産過程はこれらの前提のもとでおこなわれる。この流通にはいりこむ資本部分——給養品——はすぐれて……流動資本である。それは形態上から規定されているばかりでなく、その使用価値、すなわち消費可能であって、個人的消費に直接はいりこむ生産物であるというその素材的規定がそれ自身その形態規定の一部をなしている。

3)大流通。生産過程の外部での資本の運動。ここでは労働時間と対立した資本の時間は流通時間として現れる。生産局面からあゆみでる資本とこの局面のなかにふくまれている資本との対立から、流動資本 (flüssiges Kapital) と固定資本 (fixes Kapital) の区別が生じる。後者は、生産過程に固定され、生産過程それ自体のなかで消費される資本である。それはなるほど大流通に由来するものではあるが、それに復帰はしない。そしてそれが流通するかぎりでは、生産過程で消費され、それに封じこめられるために、流通するだけである。 (Gr. S. 570. 訳. III. 628—9頁) と。

みられるように、「資本の流通」は「資本がその異なる諸契機を経過する」ものとした「総過程」=形態No. 1 と「資本と労働能力のあいだ」の交換の過程としての「小流通」=形態No. 2 とそしてさらに「生産過程の外部での資本の運動」としての「大流通」=形態No. 3 という「三重」からなるものとしてとらえられることとなっている。いまこうした三者の流通の関連を図式化してみるならば次の如くであろう。



ところでこの後半部分では、こうした「三重」からなるものとしての「資本の流通」の規定を通して、生産過程における不変部分・可変部分という資本区分に対し新たに「固定資本」・「流動資本」という資本区分を行ない、そのうえで資本の「回転」の問題が中心基軸に措えられて展開され

ている。しかしこの「回転」にとって前提となる「固定資本」・「流動資本」という資本の形態上の区分は、「総過程」(G—W……P……W'—G') 的視点から導出されたものと「小流通」を含む「大流通」(P……W'—G'・G—W……P) 的視点から導出されたものとは異なったものとしてある。すなわち、前者の視点にもとづく「固定資本」・「流動資本」の区分は、資本が「固定存在」としてあるか否かということに基づいて、言い換えれば「あらゆる局面を通過する主体としての、流通と生産との動的統一、過程的統一としての資本は、流動資本である。それ自身がこれらの諸局面のそれぞれに束縛されたものとしての、資本の諸区別のうちに置かれたものとしての資本は、固定された資本」(Gr., S. 515. 訳. III. 566頁) であるとして規定している。これに対して、後者の「大流通」的視点では「生産過程に固定され、生産過程それ自体のなかで消費される資本」を「固定資本」と規定し、「生産局面からあゆみでる資本」を「流動資本」と規定している。それゆえ、こうした資本区分の相違によって資本の「回転」の問題も、生産期間と流通期間からなるいわば「総過程」的「回転」と生産資本内部の資本の素材区分にもとづく「固定資本」・「流動資本」そのものの「回転」からなる「大流通」的「回転」とが展開されることになっている。(16)

このように、生産過程を包摂した資本の措定する流通としての「資本の流通」には「三重」からなるものとしてその内容に相違があるが、後半部分の論理の特徴を前半部分の実現流通論的見地との対比で言えば「回転」の問題を中心に措えた「総過程」論的流過程把握ということができよう。

(16) 後半部分の「資本の流通」の規定のなかに、「総過程」的視点からする「回転」と「大流通」的視点からするそれとの相違があることから、これまでしばしば前者を『資本論』第二部第一篇のいわゆる「資本循環」論の内容に、そして後者を第二篇「資本の回転」論の内容に対応するものとする視点から『要綱』の「資本の流通過程」が研究されてきた。その代表的なものを挙げるならば、水谷氏の前掲論文のほかに、田代洋一「『経済学批判要綱』における資本循環論の展開」(『土地制度史学』第45号、1969年10月)、山田鋭夫「資本回転論の視座と課題」

上・下（『経済科学』第18巻1，2号，1971年1月3月），同「資本流通論の生成と再生産認識」上・下，『彦根論叢』第155,156号，1972年4月，6月）を挙げることができる。ここで個々の論点について触れる余裕はないが、総じてこれらの論者に共通して言えることは、方法的に、『要綱』の「資本の流通過程」論と『資本論』のそれとを直接的に対比しつつ、両者を結びつけて考察する視点が強いということである。しかしこうした視点からの考察はむしろ『要綱』以降『資本論』に至る第二部のための諸草稿を通じてなされてきたマルクスの理論的な拡充過程を無視することにつながらざるをえないであろう。これまでみてきたように、後半部分の「資本の流通」は確かに資本の措定する流通としてとらえられているが、しかしそれは資本の姿態変換としての循環過程としてとらえられているわけではない。したがって『資本論』第二部第一篇の形態的視点をともなった流通過程論としての「資本循環論」とは異質なものであり、その意味からすれば、この『要綱』では依然として「資本循環論」の欠如した「資本の流通過程」と言うことができよう。『資本論』体系の成立過程を明かにする場合には、『資本論』との共通点を強調するよりも、むしろ『資本論』との対比で欠如している点を見出し、なぜその時点のマルクスはそうした理論的欠陥を生じてしまったのか、そしてさらにどのような経過をたどってそれが補完されていったのかを明かにすることこそ重要であろう。

〔3〕ところで、以上検討を加えてきたいいわゆる「1859年のプラン草案」は、先きの注(3)でも触れたように、その作成時期が従来の1859年2—3月頃ではなく、「1861年の夏」との新説が発表されている。しかし資料的にみてもそのプランがいずれの時期に作成されたのであるかはいまだその当否が確定されているわけではない。だが、いま仮りに「1861年の夏」説に従うものとする、われわれの考察対象としている『要綱』段階のマルクスという時点からこのプランが若干隔たりを生じることが否定しがたい。そこで、より「七冊のノート」に即し、この隔たりを埋め合わせる意図をもって、いわゆる「1859年のプラン草案」からそれ以前に作成された「私自身のノートへの心覚え」に逆照射し、整理してみた。それが以下にみられる表である。

資本の生産過程から流通過程への移行。

生産力増大による資本自体の価値喪失。

（生産過程と価値増殖過程の統一と矛盾としての資本）。

（労働者自体の需要）。

資本主義的生産の制限。

資本は、生産過程から出てきてふたたび貨幣となる。

資本の流通と貨幣の流通。

各個別資本の内部における価値の前提、(用具等)。

生産過程と流通過程は流通の諸契機。

種々異なった資本（産業諸部門）の生産性は、個別資本の生産性を条件づける。

流通時間。通流の速度は、資本の量をおぎなう。

諸資本の通流速度における諸資本相互間の依存性。流通は生産の契機、生産過程とその継続期間、生産物の貨幣への転化、この手続きの期間、貨幣の生産諸条件への再転化、資本の一部分と生きた労働との交換。

輸送費用。

流通費用。

交通手段と運輸手段。

〔労働諸部門の分割〕

どのようにして、絹工業が農耕にとって必要となるのか。

（道路、運河、灌漑などの完全な例証は、それが資本主義的生産の対象となるとき、以前の公共事業（travaux publics）のかわりに事例としてふたたび利用することができる、形態の転化だけである、特殊な諸条件から区別された一般的な生産の諸条件）。市場への搬入（流通の空間的条件）は生産過程に属する。

流通の時間的契機は信用。

資本は流通する資本(Capital circulant)である。

流通の価値規定におよぼす影響。

流通時間イコール価値減少の時間。

流通〔時間〕の短縮。

流通と価値創造。

（流通諸条件における種々の資本のあいだの均等化）

資本は、価値創造の源泉ではない。

流通費用。

生産の連続性は、流通時間を止揚されたもの〔として〕想定する。

ラムジー、流通時間、そこから、資本は、利潤の固有の源泉であると推論する。

遊休資本、あらかじめ資本の増大がなくておこなわれる生産の増大、ベイリー。

資本主義的生産の目的は価値（貨幣）であって、商品、使用価値等ではない、チャーマーズ。

経済循環、流通過程、チャーマーズ。

復帰の相違、生産過程の中断（あるいは、むしろ生産過程と労働過程との不一致）、生産過程の総継続期間。

（農業、ホヂスキン。）

生産期間の不均衡。

固定している資本、資本の復帰、固定された資本  
ジョン・St・ミル。

資本の通流。

流通過程、生産過程、回転、資本は流動的である、同じく固定された資本。

流通費用。

流通時間。

流通時間と労働時間。

〔（資本家たちの自由時間）〕

〔〔輸送費用、等。〕〕

流通。

シュトルヒ。

資本の変態と商品の変態。

資本の形態転換と素材転換、資本のさまざまな形態。

あたえられた期間における諸回転。

資本の一般的性格としての流動資本。

1年が流動資本の回転の尺度。1日が労働時間の尺度。

固定された（固定している）資本と流動資本。ミル、アンダーソン、セー、クウインシー、ラムジー。

利子にたいする利子にともなう困難をみよ、その他。

商業による市場創造。

固定資本と流動する資本、リカード。

より急速か、または、より緩慢な再生産の必然性。

シスモンディ。

シェル〔ビュリエ〕、シュトルヒ。

剰余価値。生産時間。流通時間。回転時間。

資本の一部は生産時間に、一部は流通時間に交互に。

流通時間。

剰余と生産局面。資本の再生産の回数イコール回転数。総剰余価値等。

資本の流通における形態転換と素材転換。

W—G—W。G—W—G。

生産時間と労働時間のあいだの区別。

シュトルヒ。貨幣。商業階層。信用。流通。

小流通。資本と労働力能一般のあいだの交換の過程。

資本と労働力能の再生産。

流通の三重の規定または様式。

固定資本と流動資本。

流動資本と固定資本とに区分された総資本の回転時間。

このような資本の平均回転。

資本の総回転時間におよぼす固定資本の影響。

流動的な固定資本。セー、スミス、ローダーゲール。

固定資本、労働手段、機械。

固定資本、固定資本と流動資本における資本諸力への労働諸力の転位。

固定資本（機械）は、どんな意味で価値を創造するか。

ローダーゲール。

機械は、大量の労働者を前提する。

二つの特殊な資本種類としての固定資本と流通資本。

固定資本と生産過程の連続性。

機械装置と生きた労働。

発明の商売。

ブルジョア的生産の基礎（価値尺度）とその発展それ自体のあいだの矛盾、機械等。

固定資本の発展の意義。

（資本一般の発展にとっての）。固定資本と流動資本の創造の比率。

自由に処分できる時間（Disposadle time）、これを創造することが資本の主要規定、資本におけるこの時間の対抗的形態。

労働の生産性と固定資本の生産（『原因と対策』）

使用(·use)と消費(·consume), 『エ·コ·ノ·ミ·ス·ト』, 固定資本の耐久性。

資本と自然的諸要因の価値。

固定資本の大きさは、資本主義的生産の高度をしめす。

原料, 生産物, 生産用具, 消費の規定。

貨幣は固定資本であるか, 流動資本であるか?

個人的消費にかんしての固定資本と流動資本。

固定資本と流動資本とからなる資本の回転時間,

固定資本の再生産時間, 絶対に必要な生産の連続性。

労働にとっての単位時間は1日, 流動資本にとっての単位時間は1年, 固定資本の介入とともに, より長期の総期間が単位。

産業循環。

固定資本の流通。

いわゆる危険。

資本のあらゆる部分が均等に利潤をもたらすとは——誤り, リカドーその他。

同一の商品が, あるばあいには固定資本であり, あるばあいには流動資本である。

資本としての資本の販売。

使用価値として流通にはいりこむところの固定資本。

生産の前提として<現れる>どんな契機も同時にその結果<である>. 生産自身の諸条件の再生産。固定資本と流動資本としての資本の再生産。

固定資本と流動資本, 『エ·コ·ノ·ミ·ス·ト』, スミス, 流動資本の対価は, 1年間に生産されなければならない, 固定資本のそれはそうでない。固定資本はあとにつづく数年の生産に従事する。

維持費。

固定資本と流動資本による所得(revenu)。

固定資本の価値がその生産物に比例して少ないほど, それだけより合目的的。

可動的, 不動的, 固定的, 流動的。

流通と再生産の関連。

一定時間で使用価値を再生産する必要。

固定資本の価値とその生産力。固定資本の耐久性同上〔その生産力〕。

社会的諸力, 分業等は資本に費用をかけない。

機械のそれらとの区別。

また, 機械装置の充用のうえでの資本家の経済<

節約>について。

木綿工場における固定資本と流動資本との割合。シーニアの剰余労働と利潤。労働を延長する機械装置の傾向。

輸送の流通等への影響。

輸送は, ますます蓄蔵を止揚する。

資本の転態。経済循環(ニューマン)。

※上表のうち段落部分は, いわゆる「1859年プラン草案」で脱録している部分である。したがって, 『要綱』における「資本の流通過程」の基本的な論理展開を明かにする際には二次的位置付にあるものとして取扱った。

みられるように, この表からも先きのいわゆる「1859年プラン草案」の「Ⅱ資本の流通過程」にみられた異質の二つの方法的視点をヨリ鮮明に看取することができる。すなわち, 前半部分では実現流通論的見地から「流通費用」の問題が中心に展開されているのに対して後半部分では「固定資本」・「流動資本」の概念規定を中心にして「資本の回転」の問題が説かれていることがわかる。したがって, いわゆる「1859年のプラン草案」が「1861年の夏」に作成されたにしても, 『要綱』段階で「資本の流通過程」がいかなる理論領域を有していたかを考察するうえでは問題が生じないことも確認しえたであろう。

## 結 語

以上みてきたように, われわれは「資本の流通過程」がはじめて本格的に考察対象とされるにいたった『経済学批判要綱』を取り上げ, そこにおいて「資本の流通過程」がいかなる理論領域を有していたかを『経済学批判要綱』執筆過程において作成した「プラン」とその執筆後「叙述の体系」として示した「プラン」との両面から明かにしてきた。「プラン」とのかかわりのうちに考察を進めたため, 所詮その考察が外面的たらざるをえない面を残したのであるが, しかしそれだけにかえて『要綱』段階のマルクスは「資本の流通過程」の理論領域をどのようなものとしてとらえていたかの理論的な枠組みは鮮明にしえたと思われる。それは, まず流通過程を生産過程に対する補足的媒介過程としてとらえ, 資本の生産物としてのW'のG'への実現過程に局限してとらえる視点であり, したがってそこにおいては生産過程の価

値増殖過程に対して、流通過程は「価値喪失過程」として把握され、それゆえ資本の価値増殖にとって流通時間=0にすることが最大値であるという視点から「流通費用」の問題が解明されていた。しかし、こうした問題ばかりではなく、同時に前者とは異なるところの視点、すなわち生産過程を包摂した資本の措定する流通としての「資本の流通」を展開する論理もあり、ここでは「固定資本」・「流動資本」の二重・三重の概念規定を中心にして「資本の回転」の問題が論じられていた。しかもこの両者が単に併存していたというのではない。むしろ前者の論理から後者の論理へと深められていった過程であるといってもよい。したがって、こうした点に『要綱』段階の「資本の流通過程」の意義があり、同時に限界もあるといえよう。というのは、先きにも述べたように、スミスをはじめリカードにしても古典派は総じて労働生産過程を交換過程化してとらえていたため、剰余価値と利潤、価値と価格を区別しえなかったのであるが、マルクスはこの理論的な問題を「流

通の価値規定に及ぼす影響」の問題として受け止め、それを古典派には設定しえなかった「資本の流通過程」を設定することによって解決をはかっていったのであった。そのため「資本の流通過程」はマルクスにとっては一面で「流通費用」の問題、他面で「資本の回転」の問題が中心にならざるをえなかったのである。しかし、このことは同時に、形態的視点をともなった流通過程論とも言える「資本循環論」を欠如させることにもなった。こうした「資本循環論」が『要綱』以降『資本論』第二部のための諸草稿を執筆していくなかでどのようにして理論的に補完され拡充されていったのかの経緯については、商品論における「価値形態」論の形成と確立ということと有機的な関連および相互被制約性があるものとの予測をもっているが、しかし、勿論速断はできない。おのずから今後の課題として残さざるをえない。

(完)

(1978・7・5)